

# 地球に住めなくなる日

NHK出版

1900円

デイビッド・ウォレス・ウェルズ 著

藤井留美 訳 江守正多 解説

## ひとつの人類として考えよ

衝撃的なタイトルである。ただ元の英文サブタイトルの直訳は、「地球温暖化後の生き方」となっており、必ずしもネガティブなメッセージを強調しているわけではない。全24章のうち約60%の分量を占める17章までは、人類活動による「地球温暖化」を中心とし

文献にあたる原注はネット上で別に掲載されており、その部分だけで90頁（735項目）に及び、大変参考になる。

氷河期が終わった約1万年前に人類が農業を開始して現在の工業文明に至る「発展」を保証してきた完

新世の地球の気候は、特に20世紀後半以降の「地球温暖化」により、すでに崩壊しつつあることを著者は理解する。ただ、バリ協定で



表明されたような、温室効果ガスを抑制して温暖化を抑えようという世界各国の政治的努力の重要性は理解しつつ、その基層にある、より本質的な経済と社会の体制の問題として、石炭・石油の化石資源を用いた「化石資本主義」が、貧富と南北の格差を増長させつつ地球の気候を大きく変え、自然環境を破壊して、人類自らの生存を危うくし

た気候変動とそれに伴う様々な影響が、世界中の自然と人間社会にどのような現れているかを、多くの最新の論文や書籍、インターネットを含むメディアや国際機関などの報告を駆使してまとめ、特にこの数十年の急激な気候の悪化がいかに深刻な状況であるかを、赤裸々にまとめていく。参考

果ガスを抑制して温暖化を抑えようという世界各国の政治的努力の重要性は理解しつつ、その基層にある、より本質的な経済と社会の体制の問題として、石炭・石油の化石資源を用いた「化石資本主義」が、貧富と南北の格差を増長させつつ地球の気候を大きく変え、自然環境を破壊して、人類自らの生存を危うくし

安成 哲三 評

総合地球環境学研究所  
所長

てきたことを指摘する。CO<sub>2</sub>の排出量は、世界の上位10%の富裕層が世界全体の約半分を排出しているという事実をどう変えるかということこそ、地球に人類が住み続けるための条件なのである。結論として、人類はこの問題の責任を負わなくてはならないとしたうえで、「この地球という惑星で運命を共有するひとつの人類としてものを考える」という人間性への変革こそが重要であると結んでいる。今回の新型コロナウイルスによるパンデミックも、私たち人類に、全く同じ問題を問いかけていると、評者は感じている。

◆  
デイビッド・ウォレス・ウェルズ アメリカのシンクタンク（新米国研究機構）ナショナル・フェロー。ニューヨーク・マガジン副編集長。パリス・レヴュー元副編集長。ニューヨーク在住。